

川西町

～「いい町、ちかい町」をキーワードにコンパクトな町の特徴を活かす～

奈良盆地の中心部に位置する磯城郡川西町は、川に囲まれた小さな町域に、田園、住宅地、商業地、工業団地と多様な地区がコンパクトにまとまった町です。

1995年の9,847人をピークに人口が減少傾向にある中、同町は「いい町、ちかい町」をキーワードにコンパクトな町の特徴をPRする等、住民・企業の誘致に努めています。

以下、同町の主な取り組みについてご紹介します。

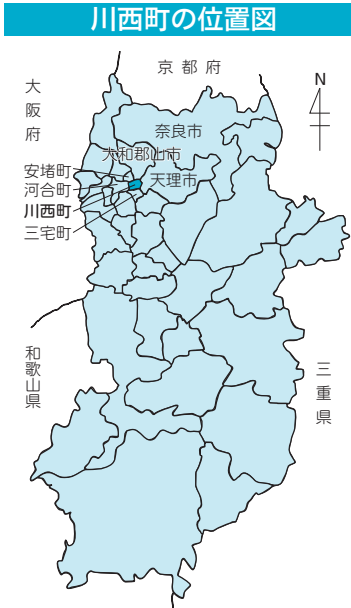
I 概要

1. 地理と歴史

奈良盆地の中心部に位置する磯城郡川西町は、人口8,485人（県内39市町村中22位）、世帯数3,248世帯（同22位）、面積5.93km²（同37位）である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015年））。4つの川が集結して大和川に合流する水利に恵まれた地で、古くから水運や農業で栄えた。室町時代、能楽観世流が発祥したとの伝説が残る、歴史ある町でもある。

町村制の施行された1889（明治22）年に、付近6か村の合併により川西村が誕生。戦後、高度成長期を経て、唐院・結崎両工業団地や住宅地が形成され都市化が進み、1975（昭和50）年に町制が施行された。川に囲まれた小さな町域に、田園、住宅地、商業地、工業団地と多様な地区がコンパクトにまとまった町である。

法隆寺IC（西名阪自動車道）に近く、また近年の大和まほろばスマートIC（同）や三宅IC（京奈和自動車道）開通で、交通利便性はさら



に高まっている。

2. 産業構造

従業地による就業者人口（15歳以上）の産業別割合は、第1次産業が1.6%、第2次産業が65.9%、第3次産業が32.5%と、奈良県全体（順に3.4%、22.2%、74.4%）に比べ第2次産業の割合が極めて高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。

農業経営体は180経営体、経営耕地面積は143ha（ともに県内19位）で、町面積の24.1%が耕地である（農林水産省「農林業センサス」（2015年））。大和野菜の一つ「結崎ネブカ」は、同町特産のネギとして知られる。



民営事業所数は319か所（県内25位）で、従業者数は3,068人（同23位）。従業者特化係数*の高い産業（産業中分類別）は、「輸送用機械器具製造業」（14.8）、「金属製品製造業」（10.3）、「その他の製造業」（6.4）の順となっている（総務省「経済センサス基礎調査」（2014年））。

製造業の製造品出荷額等（従業者4人以上）の800億円（県内6位）は、町としては県内トップである（経済産業省「工業統計表 市区町村編」（2014年））。このように製造業への特化度合いが高い理由は、町内に唐院・結崎両工業団地があり、大企業の工場も立地しているためと考えられる。

※従業者特化係数…ある産業の地域内における従業者比率を、全国における従業者比率で割って求められる数値。1より大きければ大きいほど、その産業に特化していると捉えられる。

3. 人口構造

川西町「人口ビジョン」では、同町人口は1995年の9,847人をピークに減少に転じ、2010年には8,653人へと減少しており、今後も減少傾向は続くと思われ、2015年の人口は、国立社会保障・人口問題研究所による予測値(2013年3月推計)を上回り、減少ペースは想定よりも緩やかとなっている。その背景としては、小規模ながら宅地開発が進み転入人口が増加する一方、転出人口は減少していることが挙げられる。

年齢階級別人口移動(2010年→15年)を見ると、64歳以下の男女別年齢階級では、一部を除き純移動数がプラスとなっている(総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」(2015年))。

合計特殊出生率の推移を見ると、2009年～2012年まで奈良県平均を下回っていたが、2013年には1.43と奈良県平均(1.31)を上回る水準となっている(川西町「人口ビジョン」)。

このため、年齢階級別人口割合は14歳以下が12.3%(県内12位)、15～64歳が57.0%(同17位)、65歳以上が30.8%(同23位)と、比較的

14歳以下の割合が高いのが特徴的である(総務省「国勢調査 人口等基本集計」(2015年))。

こうした中、同町は、2016年3月に「川西町まち・ひと・しごと総合戦略」を策定、個性を活かしたまちづくりを進めていくこととしている。

本稿では、同町の主な取組みを「住民誘致」、「企業誘致」、「住民主体のまちづくり」の3つの柱にわけて紹介する。

II 町の主な取組み

■ 「いい町、ちかい町」で住民誘致を図る

同町ホームページ上に設けられた移住促進のためのPRサイト「いい町、ちかい町」では、以下の4つの「ちかい」で町での暮らしやすさを発信しており、住民誘致を図っている。

(1) 「人と町」がちかい

同町は、役場・病院・学校・銀行・スーパー・コンビニ・鉄道駅等の便利施設が徒歩圏内に揃っていることによる、利便性の高さを強みとして発信している。

近くには大型公園「まほろば健康パーク」や子育て支援センター等があり、道は広く平坦であるため、自転車や徒歩で子どもと気軽に遊びに出かけられることは、子育て世代向けのアピールポイント



町内利便施設の位置図 (同町ホームページより転載)

ントの一つである。

(2)「人とヒト」がちかい

新たに暮らし始める人も、町に長く暮らす人も、お互いに関係が近いことを暮らしやすさのポイントとして発信している。

ホームページに掲載されている住民へのインタビュー記事では、他地域から引っ越してきても皆が親切ですぐ地域になじめたこと、イベントを通じて地域の人との交流が深まったこと等、暮らしやすさを実感したエピソードが紹介されている。

(3)「子育てと町」がちかい

子育て世代の積極的な誘致に向けて、同町は以下の子育て支援策の充実に力を入れている。

①川西町版ネウボラ*

妊娠期から就学前までの子育て世代が、不安や悩みを相談できる「ネウボラルーム（保健センター内）」、子育て世代同士の交流を促す子育て支援センター等、役場内各課が連携して切れ目ない支援を行う。町の子育て支援策の柱である。

*ネウボラ…切れ目ない子育て支援制度のことで、フィンランド語で「アドバイスを受ける場所」を意味する。

②川西幼稚園「預かり保育」

川西幼稚園の在園児を対象に、通常の幼稚園教育後も続けて子どもを預かる。保護者からは、子育てに追われがちな日々のリフレッシュに寄与するうえ、保育士資格取得者も常駐しており安心感が高いと評判である。

③川西スポーツクラブ「カワスポ」

年会費を支払うことで、子ども向けのスポーツ教室が安価に受講できる仕組み。大人向けの教室もあり、地域交流の促進につながっている。

④その他

川西小学校の建て替え・木質化（2013年）、同町特産の貝ボタンをあしらった小学校制服の新1年生への無償支給（2017年～）等、児童向けの施策も充実させている。

(4)「街と町」がちかい

奈良市・橿原市等への電車での移動がたやすく、また大阪・京都へのアクセスもよいことから、通



川西小学校制服（左）、校名の刻まれた貝ボタン（上）

勤・通学の利便性が高いメリットがある。

また車を使えば、馬見丘陵公園やショッピングモール、大学付属病院など町外の大規模施設へ30分圏内である。大阪・名古屋方面へ向かう法隆寺IC・大和まほろばスマートIC等の高速道路入口までは10分前後と、遠出する際のアクセスも良い。

のどかな田園風景を残す同町は、「田舎の自然と交通の利便性」を兼ね備えており、町の魅力の一つである。

■工業団地を拡大し企業誘致を図る

前述のように各ICへのアクセスが近い同町へは、かねて輸送機械工業をはじめ様々な企業が進出している。そしてさらなる雇用創出に向け、同町は企業誘致に力を入れている。

具体的には、唐院工業団地（約10ha）の周辺土地（約12ha）を工業用地として拡張し整備するとともに、誘致促進を目的とした補助制度の見直しを進め、進出企業を募っている。

9月5日、同町は奈良県と連携協定を締結した。今後、唐院工業団地のインフラ整備・企業誘致等



同町と奈良県との連携協定締結式の様子

において県の協力を得ながら取り組む予定である。

■住民主体のまちづくりに向けて

(1) 結崎駅前整備事業

町の交通の中心的機能を担う結崎駅（近鉄橿原線）は、同町唯一の鉄道駅である。ただ駅南西側の1か所しかない改札口、駅周辺の踏切や道路の狭さ、ロータリーまでの遠さや夜間の暗さ等の様々な問題があり、利用者からは、不便さや不安を感じるとの声も寄せられていた。

同町はこうした課題解決のため、結崎駅および駅周辺を一体的に整備するまちづくりを計画しており、その中心的な取組みとなったのが、「結崎駅 8800 人フューチャーセッション」である。

これは「住民に駅前整備事業を『私のプロジェクト』として携わってほしい」との思いから、鉄道駅や観光列車の設計やデザインを手掛けるデザイナーが、同町出身という縁もあり企画とファシリテーターを務めた。

この取組みは、単なる合意形成のための「住民説明会」ではない。現状の問題点の把握やスローガンづくり等のワークショップを通じて、住民の意識・関心を高め、まちづくりへの積極的な関与を促すという特長がある。

例えば川西小学校6年生を対象にしたセッション



フューチャーセッションの様子をまとめた壁新聞（一部）

ンでは、近い将来に同駅を頻繁に利用することになる児童自身に、駅や駅前にどのような機能があることが望ましいか、利用者の立場に立って考えてもらったという。

計6回のセッションを通じて、住民からは、改札を2か所にする案や、駅に隣接する佐々木塚古墳を活用した駅前広場の整備案等、町周辺活性化に向けた様々な建設的意見が出された。同町は、これらの意見をもとに鉄道会社との交渉を行い、平成32年度の完成を目指して、近く最終案をまとめる方針である。

(2) 住民提案型まちづくり事業補助金

同町は住民による主体的なまちづくりを支援するため、2016年に住民提案型まちづくり事業補助金を新設した。

同補助金は、地域資源の活用や地域課題の解決を目的とし、グループ等が自主的に取り組むまちづくり活動の経費に一定額を補助するものである。

今年度は、桜まつりやサマーフェスタ、駅前イルミネーションといった季節イベント主催団体の他、永らく町で信仰されてきた「^{あぶらかけ}油掛地蔵」の保存団体、結崎公園の美化団体が採択され、新たな人材や地域資源の発掘にも寄与している。

コンパクトな町の特性を活かしたまちづくり、住民と地域との顔の見える関係づくりを目指す川西町の取組みは、奈良県内における小規模市町村運営の一つのモデルと考えられる。

また工業団地を擁する同町は、その雇用創出力を活かすことで、なお成長の余地を残している。実は、同町内で従業する就業者に占める町外在住者の割合は74.7%に上り、県内で最も高いという特徴がある（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。これら、町外在住の町内事業所従業者に注目し、本人やその家族の定住を促進することで、生産年齢人口の維持は可能と考えられる。

（太田宜志、丸尾尚史）